慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	R・J・ホワイト著『反哲学者たち：十八世紀フランスにおけるフィロゾーフ研究』
Sub Title	R. J. White, The anti-philosophers : a study of the philosophes in eiteenth-century France
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.11 (1970. 11) ,p.92- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19701115-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

R. J. White,
The Anti-Philosophers: A Study of the Philosophes in Eighteenth-Century France
London, Macmillan, St. Martin's Press, 1970, vii＋175 pp.

R・J・ホワイト著
『反哲学者たち――十八世紀フランスにおけるフィロゾーフ研究』

「フィロゾーフと哲学者とのあいだには、少しも、あるいは何も共通したものはない」というマイケル・オークショットの言葉が冒頭にある。哲学というものは、一切の外的な利害、とくに実践的な利害からの独立性を維持すべきもので、哲学を通俗化することは哲学を貶しめることだというのであれば、オークショットの言葉通り、十八世紀フランスのフィロゾーフは哲学者という称号を奪われた、卑しむべき反哲学者であつたろう。彼らはなによりも先ず hommes engagés であつたからだ。そして、ユマニテのために闘争する彼ら自身は、その敵に対して écrasez l'infâme と宣伝しなければならなかつた。フィロゾーフは哲学者ではないからである、否、哲学的な無能さとは縁のない、それこそ否定的モラルの《異邦人》であつたと思う。

著者R・J・ホワイトはこんな情景をわれわれに髣髴させてくれる。

一七五五年の冬、エルヴェシウス夫妻はサント・アンヌ街の自宅で大舞踏会を催した。そこには、パリ社交界のあらゆる人びとが居合わせた。舞踏をリードしたのは九十八歳になるフォントネルと三歳のエリザベート・エルヴェシウス、老齢と青春、老人と子供――野獣と美女と。フォントネルは一世紀に垂んとする哲学者、可愛らしいエリザベートもまたつぎのワーズワースの詩の意味で、哲学者であつた。

汝、そのうわべの装いが
御身の魂の広大無辺を欺く
汝、最高の哲学者……力強き予言者よ、祝福されたる透視者よ！

生気に吹きこまれた木乃伊に寄り沿うて飛び跳ねていた彼女は、音楽が止むと、肉落ちた彼の脛をつねつていた。ふたたび音楽が始まつた。フォントネルはこんな陰口を聞いたことだろう、「これはほんの序の口なのさ」(Ce n'est que le premier pas qui coûte) と。そしてさらに、一体最後は(le dernier)？ と聞こえよがしの囁きも。そのようなことに聞き耳をたてるような彼ではなかつた。エリザベートの美しい母、エルヴェシウス夫人の閨房に時ならぬ時に闖入し

て、言い訳に「あゝ夫人、私がもしも齢僅か八十にすぎなかつたら」という話がパリに知れ渡つていたのだから。コルネイユ家の後裔として、ルイ十四世がフランスを気儘に統治しだした頃、フォントネルはエリサベートと同齢であつた。彼は今ではフィロゾーフの最古参となつたが、百歳の誕生日を迎えるまで、己れの亡霊を捨て去ろうとしなかつた。それゆえ、この舞踏会での二人の世代は、ちようどルイ十四世時代からフランス革命まで、「思想の偉大な鎖」に手をとり、相依つて連らなつていたわけである。

フィロゾーフのパリは、後に印象派の画家たちが描いたように、綺麗ではなかつた。道幅は狭くて、バリケードを築くに好都合な処であつた。だが、パリはまさに Cité des Lumières. そこでは輝くばかりのサロンが夜ごと賑いを見せていた。ジョフラン夫人やデュ・デファン夫人——リベルタンの伝統を引き継いだフォントネルが、ある侯爵夫人とかわす *Entretiens sur la pluralité des mondes* のなかで、"Quoi! j'ai dans la tête toute la système de l'univers! Je suis savante!" と言わせたように、彼女らもそう言つた。「ひとつの新しい、共通の思考様式」が生れつつあつた。しかしながら、啓蒙主義とは土着の思想そのものではない。デカルトの伝統に忠実であるよりも、ニュートンやロックに多くを学んだ人びとが——anglomanie と呼ばれた——フィロゾーフの最初の世代を形成したのであつた。ヴォルテールは言うまでもなく、モンテスキュー、コンディヤックはイギリスを高く評価し、フランスに新しい息吹きを与えた——当時のフランス人にとつてイングランドは *terra incognitia* であり、英語を話せたり読んだりできるものが殆んどいなかつたということを忘れてはならないだろう。

第二の世代は、「才気に溢れているが、しかしきわめて危険な男」ディドロを中心とし、ダランベール、ラ・メトリらの活躍が際立つてくる。*Lettre sur les aveugles* の検閲によつて投獄された彼は、どんな生活を送つていたのか。一七四九年の息苦しい夏の二十八日間は、薄暗い土牢に閉じこめられていた。だが、さすがに刃物職人の息子、窓の外側の屋根瓦を粉にして葡萄酒に浸し、揚枝をペン代りに、持つてきたミルトンの『失楽園』の詩の余白に、いろいろ書き込んだ。また、独房の壁には献立表を記して後から入つて来るものの利用に供した。ヴァンサンヌの看守長ド・シャトレー氏は間もなく厳格な規律をゆるめた。食事の待遇はよくなり、庭内を歩いたり、訪問客——ルソーがヴィンセンヌを訪れる途すがら、メルキュール・ド・フランス紙にディジョン・アカデミーの懸賞論文の記事をみて、『学問・芸術論』を書く契機となつた話は有名である——と会うことも、妻とともに棲むことも許された。しかし、やがてそこがしばらくは『百科全書』企画の総司令部となつたといわれる。

ディドロはまつたくフィロゾーフに相応しかつた。ビュッフォンのいわゆる「自然」あるいは「自然史」に深い関心を示し、宇宙ではなく、感覚的なレアリテ、さらに生物学的ミクロの世界を独自のスタイルで描きだした。*L'Entretien entre d'Alembert et Diderot* とか *Le Rêve de d'Alembert* のような傑作はかくして産みだされた。ラ・メトリはフィロゾーフのなかの enfant terrible であつた。

ダランベールは、彼をフィロゾーフと呼ぶことは哲学への侮辱であるとさえ言う。本書の著者自身は、*L'Homme machine* はまさしく人間的な書であることを認めるが、その余りにも不可知論的な見解がかえつて一種のドグマのように受け取られざるを得ず、エルンスト・カッシーラーのような評価がくだされるのだ。つまり彼は例外者である、と。ともかく、『百科全書』第一巻が出版された一七四九年、それから認可が取消された五九年までのあいだ――出版監査官マルゼルブやド・ポンパドゥール夫人の陰ながらの救助がなければ断ち消えになつていたかも知れないが、この時期はまさに「危機の十年」であつた。しかも顧みれば、近代精神が花咲き誇つたひと時でもあつたわけだ。

チェンバーズのものに倣つて、アルファベット順に巻を追うことになつたのは止むを得なかつたが、『百科全書』に *dictionnaire raisonné* という副題を附したことは、認識の統一的な連繋、普遍的理性の首尾一貫性を明示している。（本書のなかにディドロの *Système figuré des Connoissances Humanies* が折り込まれている）。ダランベールの書いた第一巻のはじめの *Discours préliminaire* は、「十八世紀精神のもつとも秀れた要約」とみなしてよい。この尨大な企画は、フィロゾーフの著名な人びとはもとより、僧侶、侍医、実業家、職人、いわゆる《コモン・マン》までを含めておよそ一三〇名、まさに À LA POSTÉRITÉ ET À L'ÊTRE QUI NE MEURT POINT に献じられた記念碑であつた。最後の十巻は一七六五年から六年にかけて出版され、発刊場所も Neuchâtel となつていたが、誰でもそれがパリであることを疑わなかつた。こうして「暗闇のなかで」完成されたという事実にもかかわらず、二十年間の苦闘と努力は、十八世紀フランスの知性の煌きとして、燦然たる『百科全書』を世界に残してくれた。反逆、過誤、不信仰、道徳的堕落……あらゆる非難をこうむりながら。

国家と教会の基礎に対する百科全書学派（アンシクロペディスト）の執拗なプロテストは、陰謀の企てとか組織に類するものがあつてのことではなかつた。むしろ、彼らの政治思想にはオリジナルなものが無く、立憲君主制、権力分立、法の支配、自由の政治、市民の権利を主張したものであつて、依然としてロックおよびモンテスキューの生徒にとどまつている。彼らにとつて労働者（le laboureur）というものは、フィジョクラートと同じく、土地を耕す農民にほかならなかつた。フィロゾーフは改良主義的で、ジロンド党に近く、ジャコバン的支配やテロルを求めていたのでは決してない。ヴォルテールのいう les moeurs の研究に重点が置かれていたように、一般的にフィロゾーフは、政治よりも社会に多くの関心を抱いていた。バスティーユ陥落を前にして、彼らの殆んどが死んでしまつたわけだが、革命の衝迫とともに、政治的色調が濃くなつて行つたのは当然であつた。ヴェルサイユ宮殿のポンパドゥール夫人の部屋のなかに *Entrol=sol* の中心があり、ディドロ、ダランベール、デュクロ、さらにフランソワ・ケネーとかテュルゴーなどが政治・経済に関する議論を熱心にかわしていた。したがつて、マルクスの言葉を真似るならば、彼らは世界を解釈するだけでなく、世界を変革することをめざしていたことは

紛れもない。

サロンの様子も変つてきた。女性の魅惑や噂話、機智に満足しているときではなくなつた。エルヴェシウス邸、とりわけドルバックの館——Café de l'Europe と呼ばれていた——は生き生きした雰囲気を漂わせていた。奇妙なことに、エルヴェシウスは『百科全書』に寄稿していない。絶世の美女を妻とし、フォントネルと一緒に踊つたエリザベートらに囲まれた良き父であり、友人にもできる限りの親切を尽くした彼なのだが、*De l'esprit* は害毒の如くみなされていた。ルソーが「サヴォワの司祭の信仰告白」を書いたのは、ほかでもないこの書を嫌悪したためである。*De l'homme* にしても同様である。エルヴェシウスの悪名は、性的快楽の玄人であつたからではない。じつは、幸福と快感を同等に考えるところに、彼の政治理論の源泉があるのだが、そのために各人は社会的に有用な方法で関係し合わねばならない。適切な環境も重要なことだが、それゆえに、ロック的な *tabula rasa* としての人間にとり、L'education peut tout と彼は豪語して憚らない。エルヴェシウスは人類救済の予言者なのか、フィロゾーフの倨傲(ヒュブリス)は皮肉にも、近代国家のエリート主義による政治指導を仄めかしている。他方、ドルバックの *Le Système de la nature* が若きゲーテを戦慄せしめたことは余りにも有名である。「ファナティシズムに対するファナティックな書」とホワイトは言うが、それこそ、無神論への改悛者にしてはじめて書きうる怨恨と憎悪なのではないか。男爵の遺体はパリのサン＝ロッシュ教会に埋葬された。そこの聖処女礼拝堂の祭壇の裏には、St. Denis と St. Paul とが、位牌もなく並べられているという。

マルキ・ド・コンドルセは、フィロゾーフたちのうちでもつとも貴族的であつた。Condorcet を Comte d'Orsay と人びとは聞き違えた程である。積分計算に関する小冊子がダランベールの賞讃を受け、二十六歳で科学アカデミーに選ばれるという俊才であつた。彼が政治問題に翕然として注意を集中したのは、科学、とくに数学の方法を政治・社会に適用しようという野心的試みからであつた。mathématique social という構想、それはアカデミズムの演習なのではなく、デモクラシーの未来の基礎づけとなるべきものであつた。コンドルセ自身は、テュルゴー蔵相のもとで鋳造局査察官を務め、革命勃発とともに、パリ市議会のメンバーとなり、さらに立法議会のメンバー、その教育委員会において重きをなした。彼の公共教育についての立案などは瞠目すべきものである。しかし、ジャコバン党の抬頭によつて追われる身となり、彫刻家フランソワ・ヴェルネの未亡人にかくまわれる。中庭ごしの一階で最後の日々を暮していた彼は、*Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humaine* を執筆しつつ、人類の進歩に遠く想いを馳せていた。

著者ホワイトは、この素描を「フィロゾーフの遺言」であろうと言う。その最後の一節は、ヴェルネ夫人の棲家を去る前に、コンドルセによつて謳われた人間の不可避的な完全可能性への讃歌であつて、これほど感動的なものは歴史上にない、とさえ述べられている。すなわち、

人類に関するこの展望は、すべての鉄鎖から解放され、その進歩の敵たちの支配からも、偶然の支配からも免れて、真理や徳や幸福の道路のうちに、健全にして確実な足どりをもつて進んで行つて、今なお地球上を汚濁し、この哲学者をもしばしばその犠牲としている誤謬や犯罪や不正を見て嘆いている哲学者を慰藉するような光景を、どんなに見せてくれていることか！　この展望を観照することによつてこそ、理性の進歩のため、はたまた自由の擁護のため、この哲学者が払つて努力に価する代償を受けとるのである。そのときこそ哲学者の努力は、人間の運命の永遠の鎖に敢然と結びつけられるのである。このときこそ、徳についての真の報酬・永続的な善をなしたという喜悦を見出すのであり、運命が、僻見や奴隷状態をともなう悲しむべき報酬によつて破滅せられるということは、も早なくなるであろう。このような観照は、哲学者にとつて一つの安息所であり、その迫害者たちの回想も、かれをそこまでは追いかけて来ることはできないし、この安息所においては、自分の本性の威厳も権利も恢復した人間とともに思索によつて生きて行つて、貪婪、恐怖ないし羨望のために懊悩し、堕落した人間であることを忘れてしまうのである。ここにおいてこそかれは、その仲間とともに一つの理想郷――それは彼の理性が拵えることのできたものであり、人間性に対するかれの愛情から、もつとも純粋な快楽をもつて飾りつけたものである――のうちに真に生活しているのである。

コンドルセ『人間精神進歩史』渡辺誠訳（岩波文庫）
第一部二八六―二八七頁

彼は死のうとして田舎を彷徨つた。ヴェルネ夫人に迷惑をかけたくなかつたからだ。彼は疲れ果てた。クラマール・ル・ヴィニョブルの旅籠屋にたどり着いたときには、飢えて死にそうだつた。卵十二箇のオムレツを註文したという。「自分の食欲を充すオムレツをつくるには幾くつ卵を割つたらよいか位どうして知つていなかつたのだろうか」といつた歴史家の不幸な心配が微笑ましい話をぶち毀してしまうが、本当のことであるらしい。逮捕されてブール・ラ・レーン（現在のブール・ラ・エガリテ）に連れ去られたが、友人たちが彼をギロチンに送るひと足先に、看守が死んでいるのを見つけた。恐らく、毒を飲んで自殺したのではないか。彼の遺骸は何処にあるのか誰も知らない、この町には今もなおコンドルセ広場が存在しているのだが。

本書のエピローグには、実際に、本書にエピローグはいらないと思うけれども、フィロゾーフの名誉回復を称えるように、二十世紀における非理性の攻撃の後、『啓蒙主義の哲学』の再検討をあえて行つたドイツの哲学者の言葉が添えられている。

われわれはこの時代をいたずらに軽蔑したり尊大に見くだしたりすることなく、……勇を鼓してふたたび啓蒙主義と優劣をきそわねばならない。理性と科学を「人間の最高の力」とみなして尊んだこの世紀は、われわれ自身にとつても、過去の失われたものであつてはならない。われわれはそれをあるがままの形において見るばかりでなく、この形状を生み出し形成した根元的な力をもう一度発揮せしるめような道を見出さねばならない。

E・カッシーラー『啓蒙主義の哲学』中野好之訳
（紀伊国屋）X頁。

Sapere aude――キリスト教的啓示宗教の呪縛から離反しようとしたアンティ・クリストのパリ教会。pour changer la façon comm-

une de penser とフィロゾーフは口々に叫んだ。ホワイトは、彼らがしばしば「新しい異教徒」と呼ばれると書いているが、ピーター・ゲイの近著『啓蒙主義』第一巻の副題が、「近代的異教の抬頭」であることは注目に価する。なお、この書に関して筆者は、本誌第四十一巻第十号に書評しておいたことを附記して稿を閉じる。

（奈良和重）

Frederick C. Mosher,
Democracy and the Public Service
New York, Oxford University Press, 1968, pp. 219.

フレデリック・C・モウジャ著
『民主主義と公務員制』

本誌第四十三巻第二号に紹介したE・S・レッドフォードの書と同じく、本書はR・C・マーティンを編集者とする「行政と民主主義」シリーズの中のひとつである。

著者は本書において、国民の投票や議会・政府の任命権によつても交替させることのできない恒久的地位をもつた公務員を、「人民による」政治の原則すなわち民主主義に適合させるにはいかにしたらよいかを問い、それにひとつの答を与えようとする（三、五ページ）。その際著者は、一方で、職業の専門分化および技術と社会の複雑化がますます不可逆的に進み、それに伴つてその地位を保障された任命官からなる公務員制への依存度も一層高まるものと考え、他方、かつてH・ファイナーが積極的に主張した外在的責任（objective responsibility）論は第二次大戦以後の情勢の発展の具合からみて支持しがたく、かわつてC・J・フリードリッヒが主張した内在的責任（subjective responsibility）論が支持される、とする（三、一〇、二〇九ページ）。したがつて、外在的責任を確保する手段の可能性についての考察は、本書ではまつたく行なわれない。

それでは右の問に対して、今日までどのような答が出されてきたであろうか。著者は、公務員が「従順な僕」であつた時代には政治と行政の関係が問題視されなかつたことを指摘し、いわゆる「政治・行政二分論」を、その地位を保障された中立的公務員をいかにしてコントロールするかという困難な問題——当初のわれわれの設問——からの「知的な逃避」（六七ページ）であつたと性格づける。なぜならば、著者によれば、「政治と行政の制度的な二分法の原理」（四～五ページ）は西欧の代表制民主主義の発達とその地位を保障された専門的・恒久的な公務員制の必要性の認識にともなつて現われてきたもので、「政策（政治）は、人民によつて選出される代表者つまり議員・大統領および大統領によつて政治的に任命され彼に対して責任を持つ補佐官によつて決定されるものであり、一方、有能